

文芸と道徳

夏目漱石

青空文庫

私はこの大阪で講演をやるのは初めてであります。またこういう大勢の前に立つのも初めてであります。実は演説をやるつもりではない、むしろ講義をする気で来たのですが、講義と云うものはこんな多人数を相手にする性質のもではありません。これだけの聴衆全体に通るような声を出そうとすれば——第一出る訳がないけれども、万一出るにしても十五分ぐらいで壇を降りなければやりきれないだろうと思います。したがって、始めての事でもあるしこれほど御集りになった諸君の御厚意に対してもなるべく御満足の行くように、十分面白い講演をして帰りたいのは山々であるけれども、しかしあまり大勢お出になったから——と云って、

けっしてつまらぬ演説をわざわざしようなどという悪意は毛頭無いのですけれども、まあなるべく短かく切上げる事にして、そうして——まだ後にも面白いのがだいぶありますから、その方で埋め合せをして、まず数でコナすようなことにしようと思う。実際この暑いのにこうお集まりになって竹の皮へ包んだ寿司すしのように押し合っているはたまりますまい。また講演者の方でも周囲前後左右から出る人の息だけでも——ちよつとここへ立つて御覧になればすぐ分りますが——実際容易なものではありません。実はこういうように原稿紙へノートが取つてありますから、時々これを見ながら進行すれば順序もよく整い遺漏いろうも少なく、大変都合が好いのですけれども、そんな手温てぬるい事をしてはとても諸君がお

となしく聴いていて下さるまいと思うから、ところどころ——ではない大部分端折はしよつてしまつてやるつもりであります。しかしもしおとなしく聴いて下されば十分にやるかも知れない。やろうと思えばやれるのです。

問題はあすこに書いてある通り「文芸と道徳」と云うのですが、御承知の通り私は小説を書いたり批評を書いたり大体文学の方に従事しているために文芸の方のことをお話する傾かたむきが多うございます。大阪へ来て文芸を談ずると云うことの可否は知りません。儲もつける話でもしたら一番よかろうと思つてはいるんですが、「文芸と道徳」では題をお聴きになつただけでも儲かりません。その内容をお聴きになつてはなお儲かりません。けれども別に損をする

というほどの縁喜えんぎの悪い題でもなかろうと思うのです。もちろん御聴おききになる時間ぐらいは損になりますが、そのくらいな損は不運あきらと諦めて辛抱して聴いていただきたい。

昔の道德と今の道德と云うものの区別、それからお話をしたいと思いますが——どうも落ちついてやっていられないような気がしてたまらない。その前にちよつとこの題の説明をしますが、

「道德と文芸」とある以上、つまり文芸と道德との関係に帰着するのだから、道德の関係しない方面、あるいは部分の文芸と云うものはここに論ずる限りでない。したがって文芸の中うちでも道德の意味を帯びた倫理的の臭味くさいみを脱却する事のできない文芸上の述作についてのお話と云つてもよし、文芸と交渉のある道德のお話と

云つてもよいのです。それでまず道徳と云うものについて昔と今の区別からお話を始めてだんだん進行する事に致します。

昔の道徳、これは無論日本での御話ですから昔の道徳といえは維新前の道徳、すなわち徳川氏時代の道徳を指すものであります。が、その昔の道徳はどんなものであるかと云うと、あなた方も御承知の通り、一口に申しますと、完全な一種の理想的の型を拵こしらえて、その型を標準としてその型は吾人が努力の結果実現のできるものとして出立したものであります。だから忠臣でも孝子でももしくは貞女でも、ことごとく完全な模範を前へおいて、我々ごとき至らぬものも意思のいかん、努力のいかんに依つては、この模範通りの事ができるんだといったような教え方、徳義の立て方で

あつたのです。もつとも一概に完全と云いまして、意味の取り方で、いろいろになりますけれども、ここに云うのは仏語ぶつごなどで使う純一無雜まじまず混りけ気のないところと見たら、差さ支つかえないでしょう。例えばあらがね鉞ねのように種々な異分子を含んだ自然物でなくって純金と云つたように精錬した忠臣なり孝子なりを意味しております。かく完全な模型を標ひょう榜ぼうして、それに達し得る念力をもつて修養の功を積むべく余儀なくされたのが昔の徳育であります。もう少し細かく申すはずですが、略してまずそのくらいにして次に移ります。

さてこういう風の倫理観や徳育がどんな影響を個人に与えどんな結果を社会に生ずるかを考えて見ますと、まず個人にあつては

すでに模範が出来上りまたその模範が完全という資格を具えたものとしてあるのだから、どうしてもこの模範通りにならなければならぬ、完全の域に進まなければならぬと云う内部の刺激やら外部の鞭撻べんたつがあるから、模倣という意味は離れますまいが、その代り生活全体としては、向上の精神に富んだ気概の強い邁まい往おうの勇を鼓舞されるような一種感激性の活計を営むようになります。また社会一般から云うと、すでにこういう風な模範的な間然するところなき忠臣孝子貞女を押し立てて、それらの存在を認めくらいだから、個人に対する一般の倫理上の要求はずいぶん苛酷なものである。また個人の過失に対しては非常に厳格な態度をもっている。少しの過ちがあつても許さない、すぐ命に関係してくる。

そうでしよう、昔の人は何ぞと云うと腹を切つて申訳をしたのは
 諸君も御承知である。今では容易に腹を切りません。これは腹を
 切らないですむからして切らないので、昔だつて切りたい腹では
 けつしてなかつたんでしよう。けれども切らせられる。いわゆる
 つめばら
 詰腹で、社会の制裁が非常に悪辣苛酷あくらつかこくなため生きて人に顔が
 合わされないからむやみに安く命を棄すてるのでしよう。

今の人から見れば、完全かも知れないが実際あるかないか分ら
 ない理想的人物を描いて、それらの偶像に向つて瞬間の絶間なく
 努力し感激し、発憤し、また随喜し渴仰して、そうして社会から
 は徳義上の弱点に対して微塵みじんの容赦もなく嚴重に取扱われて、よ
 く人が辛抱しておつたものだという疑も起るが、これにはいろいろ

ろの原因もありましょう。第一には今のよう^に科学的の観察が行届かなかつた。つまり人間はどう教育したつて不完全なものであると云うことに気がつかかなかつた。不完全なのは、我々の心掛が至らぬからの横おうちやく着に起因するのだからして、もう少し修養して黒砂糖を白砂糖に精製するような具合に向上しなければならんという考で一生懸命に努力したのである。すなわち昔の人には批判的精神が乏しかつた。昔から云い伝えている孝子とか貞女とか称するものが、そつくりそのままの姿で再現できるといふ信念が強くて、批判的にこれらの模範を視みる精神に乏しかつたと云うのがおもなる原因でありましょう。一口に云えば科学と云うものがあまり開けなかつたからと云つてようございます。のみならずそ

の当時は交通が非常に不便でありまして、東京から大阪へちよつと手紙一本で呼出されて来て講演をすると云うようなことすら、できないとは限りませんが、なかなか億おっくう劫おっくうでこう手軽には行きません。来るにしても駕籠かごに揺られて五十三次を順々に越すのだから、たやすくは間に合いかねます。間に合いませんむとすれば、私がどんな人間であるかは、諸君に知れずにすんでしまう訳である。知らなければよほどえらい人だと思ってくれやしないかと思う。こうやって演壇に立つて、フロックコートも着ず、妙な神戸辺の商館の手代が着るような背広などを着てひよこひよこしては安っぽくていけない。ウンあんな奴やつかという気が起るにきまつている。が駕籠の時代ならそうまで器量を下げずにすん

だかも知れない。交通の不便な昔は、山の中に仙人がいると思つておつたくらいだから、江戸には漱石といつて仙人ではないが、まあ仙人に近い人間がいるそうだからの評判で持ち切つて下されば私もはなはだ満足の至りであつたらうが、こんにち今日汽車電話の世の中ではすでに仙人そのものが消滅したから、仙人に近い人間の価値も自然下落して、商館の手代そのままの風采ふうさいを残念ながら諸君の御覧に入れなければならぬ始末になります。次に、昔は階級制度で社会が括くられていたのだから、階級が違つて容易に接触すらできなくなる場合も多かつた。今でも天子様などにはむやみには近づけません。私はまだ拜はい謁えつをしません、昔は一般から見て今の天皇陛下以上に近づきがたい階級のもものがたくさん

おつたのです。一国の領主に言葉を交えるのすら平民には大変な
 異例でしょう。土下座とか云つて地面じへたへ坐つて、ピタリと頭を下
 げて、肝腎かんじんの駕籠かごが通る時にはどんな顔の人がいるのかまるで
 物色する事ができなかつた。第一駕籠の中には化物がいるのか人
 間がいるのかさえ分らなかつたくらいのもものと聞いています。し
 てみると階級が違えば種類が違ふという意味になつてその極はど
 んな人間が世の中にあるうと不思議を挟む余地はぎのなくくらいに自
 他の生活に懸隔けんかくのある社会制度であつた。したがつて突拍子とつぴょうし
 もない偉い人間すなわち模範的な忠臣孝子その他が世の中には現
 にいるという觀念がどこかにあつたに違ない。

以上の諸原因からして自然模範的の道徳を一般に強しいて怪しま

なかつたのでありましょう。また強いられて黙つていもし、あるいは自みずから進んで己しに強いもしたのでしよう。ところが維新以後四十四五年を経過した今日になって、この道德の推移した経路をふり返つて見ると、ちゃんと一定の方向があつて、ただその方向にのみ遲疑なく流れて来たように見えるのは、社会の現象を研究する学者に取つてはなほだ興味のある事こと柄がらと云わなければなりません。しからば維新後の道德が維新前とどういふ風に違つて来たかと云うと、かのピタリと理想通りに定つた完全の道德というものしを人に強しうる勢力がだんだん微弱になるばかりでなく、昔渴仰した理想その物がいつの間まにか偶像視せられて、その代り事実と云うものを土台にしてそれから道德を造り上げつつ今こんにち日まで

進んで来たように思われる。人間は完全なものでない、初めは無論、いつまで行っても不純であると、事実の觀察に本もといた主義をひょうぼう標榜したと云つては間違になるが、自然の成行を逆に点検して四十四年の道徳界を貫いている潮流を一句につづめて見るとこの主義にほかならんように思われるから、つまりは吾々われわれが知らず知らずの間にこの主義を実行して今日に至つたと同じ結果になつたのであります。さて自然の事実をそのままに申せば、たといかな忠臣でも孝子でも貞女でも、一方から云えばそれぞれ相当の美德を具そなえているのは無論であるがこれと同時に一方ではずいぶんいかがわしい欠点をもっている。すなわち忠であり孝であり貞であると共に、不忠でもあり不孝でも不貞でもあると云う事で

あります。こう言葉に現わして云うと何だか非常に悪くなりますが、いかに至徳の人でもどこかしらに悪いところがあるように、人も解釈し自分でも認めつつあるのは疑もない事実だろうと思うのです。現に私がこうやって演壇に立つのは全然諸君のために立つのである、ただ諸君のために立つのである、と救世軍のようなことを言ったって諸君は承知しないでしょう。誰のために立つているかと聞かれたら、社のために立つている、朝日新聞の広告のために立っている、あるいは夏目漱石を天下に紹介するために立っている、と答えられるでしょう。それで宜よろしい。けっして純粋な生き一いっ本ぽんの動機からここに立つて大きな声を出しているのではない。この暑さに襟えりのグタグタになるほど汗を垂らしてまで諸君の

ために有益な話をしなければ今晚眠られないというほど奇特きとくな心

掛は実のところありません。と云ったところでこう見えても、満ま

んざら

更好意も人情も無いわがまま一方の男でもない。打ち明けたと

ころを申せば今度の講演を私が断つたつて免職になるほどの大事

件ではないので、東京に寝ていて、差さ支しかえがあるとか健康が許

さないとか何なんとかかとか言訳の種こしらを拵こしらえさえすれば、それですむ

のです。けれども諸君のためを思い、また社のためを思い、と云

うと急に偽善めきますが、まあ義理やら好意やらを加味した動機

からさつそく出て来たとするればやはり幾分か善人の面影おもかげもある。

有ありてい体に白状すれば私は善人でもあり悪人でも——悪人と云うの

は自分ながら少々ひどいようだが、まず善悪とも多少混まじった人間

なる一種の代物しろもので、砂もつき泥もつき汚きたない中に金と云うものが有るか無いかぐらいに含まれているくらいのところだろうと思う。私がこういう事を平気で諸君の前で述べて、それであなた方がたは笑って聴いているくらいなのだから、今の人は昔に比べるとよほど倫理上の意見についても寛大になっている事が分ります。これが制裁の嚴重で模範的行動を他に強しいなければやまない旧幕時代であつたら、こんな露骨を無遠慮にいう私はきつと社長に叱られます。もし社長が大名だつたなら叱られるばかりでなく切腹を仰おほせつかるかも知れないところですから、明治四十四年の今日は社長だつて黙っている。そうしてあなた方は笑っている。これほど世の中は穏かになつて来たのです。倫理観の程度が低くなつ

て来たのです。だんだん住みやすい世の中になって御互に仕合しあわせでしよう。

かく社会が倫理的動物としての吾人に対して人間らしい卑近な徳義を要求してそれで我慢ぜんじするようになって、完全とか至極しごくとか云う理想上の要求を漸次ぜんじに撤回してしまつた結果はどうなるかと云うと、まず従前から存在していた評価率（道徳上の）が自然の間に違つてこなければならぬ訳になります。世の中は恐ろしいもので、だんだんと道徳が崩くずれてくるとそれを評価する眼が違つてきます。昔はお辞儀の仕方が氣に入らぬと刀の束つかへ手をかけた事もありましたろうが、今ではたとい親密な間あいだから柄柄でも手数のかかるような挨拶あいさつはやらないようであります。それで自他共に

不愉快を感じずにすむところが私のいわゆる評価率の変化という意味になります。御辞儀などはほんの一例ですが、すべて倫理的意義を含む個人の行為が幾分か従前よりは自由になったため、窮屈の度が取れたため、すなわち昔のように強いて行い、無理にもなすという瘠^{やせがまん}我慢も圧迫も微弱になったため、一言にして云えば徳義上の評価がいつとなく推移したため、自分の弱点と認めるようなことを恐れもなく人に話すのみか、その弱点を行為の上に露出して我も怪しまず、人も咎^{とが}めぬと云う世の中になったのであります。私は明治維新のちようど前の年に生れた人間でありますから、今日この聴衆諸君の中に御見えになる若い方とは違って、どっちかという中途半端の教育を受けた海陸両棲動物のような

怪しげなものでありますが、私らのような年輩の過去に比べると、今の若い人はよほど自由が利きいているように見えます。また社会がそれだけの自由を許しているように見えます。漢学塾へ二年でも三年でも通かよつた経験のある我々には豪えらくもないのに豪えらそうな顔をしてみたり、性を矯ためて瘖やせがまん我慢を言い張ちつて見たりする癖がよくあつたものです。——今でもだいぶその気味があるかも知れません。——ところが今の若い人は存外たんぱく淡泊で、昔のような感激性の詩趣を倫理的に發揮する事はできないかも知れないが、大体吹き抜けの空筒からづつで何でも隠かくさないところがよい。これは自分を取り繕つくろいたくないという結構な精神の働いている場合もありましょうし、また隠かくさない明けッ放しの内臓を見せても世間で

別段鼻をつま抓んでにが苦い顔をするものがないからでもありませんが、私の所へ時々若い人などが初めて訪問に来て、後から手紙などにその時の感想をありのままに書いて送ってくれる場合などでさえ思いもよらぬ告白をする事があるから面白いです。と云つて大した弱点を見てくれと云わんばかりに書く訳でもないが、とにかくこつちから頼みはしないので、先方から勝手に寄こすくらいの酔興的な閑文字すなわち一種の意味における芸術品なのだから、もし我々の若い時分の気持で書くとすれば、天下の英雄君と我とのみとまで豪がらないにせよ、習俗的に高雅な観念を会え釈しゃくなく文字の上に羅列して快よい一種の刺戟しげきを自己の倫理性が受けるように詩趣を發揮するのが通例であるが、今例に引こうとする手紙な

どにはそんな面影おもかげはまるでない。まず門を入ったら胸騒ぎがしたとか、格子こうしを開ける時にベルが鳴ってますます驚いたとか、頼むと案内を乞うておきながら取次とりつきに出て来た下女るすが不在だと言つてくれればよかったと杳脱くつぬぎの前で感じたとか、それが御宅ですという一言で急に帰りたい心持に変化したとか、ところへこちらへ上れとまた取次に出て来られてますます恐縮したとか、すべてそういう弱い神経作用がいささかの飾り気もなく出ている。徳義的批判を含んだ言葉で云えば臆病おくびょうとか度胸がないとか云うべき弱点を自由に白状している。たかが夏目漱石の所へ来るのにこうビクビクする必要はあるまいとお思いかも知れませんが実際あるのです。しかし私はこれが今の青年だからあるのだと信じま

す。旧幕時代の文学のどこをどう尋ねてもこんな意味の訪問感想録はけっして見当るまいと信じます。この春でしたがある所に音楽会がありました。その時に私の知った人が演奏台に立って歌うたいました。私は招待を受けて一番前の列の真中まんなかにいて聴いていました。ところがその歌は下手でした。私は音楽を聞く耳も何も持たない素人しろうとではあるがその人のうたいぶりはすこぶる不味まずいように感じました。あとでその人に会って感じた通り不味いと云いました。ところがその音楽家はあの演奏台に立った時、自分の足がブルブルふる顫えるのに気が着いたかと私に聞きます。私は気が着かなかったけれども本人自身は足が顫えたと自白する。昔ならたとい足が顫えても顫えないと云い張ったでしょう。何とか

負惜みでも言いたいくらいのところへ持つて来て、人の氣がつきもしないのに自分の口から足がガクガクしたと自白する。それだけ今の人が淡泊になったのじゃないでしょうか。またこれほど淡泊になれるだけ世間の批判が寛大になったのじゃないでしょうか。人間にそのくらいな弱点はありがちの事だとテンから認めているのじゃないでしょうか。私は昔と今と比べてどっちが善いとか悪いとかいうつもりではない、ただこれだけの区別があると申したいのであります。また過去四十何年間の道徳の傾向は明かにこういう方向に流れつつあるという事実を御認めにならん事を希望するのであります。

古今道徳の区別はこれで切上げておいて話は突然文芸の方へ移

ります。もつとも文芸の方の話を詳しく云うつもりではないから、必要な説明だけに留めて、ごくざつとしたところを申ししますが、近年文芸の方で浪漫主義及び自然主義すなわちロマンチズムとナチュラリズムという二つの言葉が広く行われて参りました。そうしてこの二つの言葉は文芸界専有の術語でその他の方面には全く融通の利かないものであるかのごとく取扱われております。ところが私はこれからこの二つの言葉の意味性質を極めて簡略に述べて、そうしてそれを前申上げた昔と今の道德に結びつけて両方を綜合して御覧に入れようと思うのです。つまり浪漫主義も自然主義も文芸家専有の言語ではないという意味が分ればその結果自然の勢いでこれらがまた前説明した二種の道德と関係して来る

と云うのであります。

この浪漫主義自然主義の文学についてちよつと申上げる前にあらかじめ諸君の御注意を煩わづらわしておきたい事がありますが、前も御断り申したごとく今日のお話はすべて道徳と文芸との交渉関係でありますから、二種類の文学のうち（ことに浪漫主義の文学のうち）道徳の分子の交つて来ないものは頭から取除とりのけて考えていただきたい。それからよし道徳の分子が交つていても倫理的觀念が何らの挑ちようはつ撥はつを受けない——否受け得べからざるていの文学もまた取り除のけて考えていただきたい。それらを除いた上でこの二種類の文学を見渡して見ると浪漫主義の文学にあつてはその中に出てくる人物の行為心術が我々より偉大であるとか、公明であ

るとか、あるいは感激性に富んでいるとかの点において、読者が倫理的に向上遷善の刺戟しげきを受けるのがその特色になっています。この影響は昔し流行はやった勸善懲惡かんぜんちようあくという言葉と関係はありますが、けっして同じではない。ずっと高尚の意味で云うのですから誤解のないように願います。また自然主義の文学では人間をその伝説的の英雄の末孫か何かであるようにもつたいをつけてあげたそうには書かない。したがって読者も作者も倫理上の感激には乏しい。ことによると人間の弱点だけを綴つづり合せたように見える作物もできるのみならず往々おうおうその弱点がわざとらしく誇張される傾きかたむさえあるが、つまりは普通の人間をただありのままの姿に描くえがのであるから、道德に関する方面の行為も疵瑕しつか交出すると

いうことは免まぬかれぬ。ただこういうあさましいところのあるのも人間本来の真相だと自分でも首肯うなずき他ひとにも合点がてんさせるのを特色としてゐる。この二つの文学を詳くわしく説明すればそれだけで大分時間が経ちますから、まあ誰も知つてゐるぐらいの説明で御免ごめんを蒙こうむつて、この二つの文学が前の二傾向の道徳をその作物中に反射してゐるといふことにさえ気がつけば、ここに始めて文芸と道徳とがいずれの点において関係があるかと云うことも明かになつて来ようと思ひます。

返す返す申すようですが題がすでに文芸と道徳でありますから、道徳の關係しない文芸のことは全然論外に置いて考えないと誤解を招きやすいのであります。道徳に關係の無い文芸の御話をすれ

ば幾らでもありますが、例えば今私がここへ立つてむずかしい顔をして諸君を眼下に見て何か話をしている最中に何かの拍子で、ひょうし卑陋な御話ではあるが、大きな放屁をするとする。そうすると諸君は笑うだろうか、怒るだろうか。おこそこが問題なのである。と云うといかにも人を馬鹿にしたような申し分であるが、私は諸君が笑うか怒るかでこの事件を二様に解釈できると思う。まず私の考では相手が諸君のごとき日本人なら笑うだろうと思う。もつとも実際やってみなければ分らない話だからどっちでも構わんようなものだけでも、どうも諸君なら笑いそうである。これに反して相手が西洋人だと怒りそうである。どうしてこう云う結果の相違を来すかという、それは同じ行為に対する見方が違うからだ

言わなければならぬ。すなわち西洋人が相手の場合には私の卑陋ろうのふるまいを一閃に徳義的に解釈して不徳義——何も不徳義と云うほどの事もないでしょうが、とにかく礼を失していると見て、その方面から怒るかも知れません。ところが日本人だと存外単純に見み做なして、徳義的の批判を下す前にまず滑稽こっけいを感じて嘖ふき出すだろうと思うのです。私のしかつめらしい態度と堂々たる演題とに心を傾かたむけて、ある程度まで嚴肅の気分を未来に延長しようという予期のある矢先へ、突然人前では憚はばかるべき異な音を立てられたのでその矛盾の刺激に堪たえないからです。この笑う刹那せつなには倫理上の觀念は毫ごうも頭を擡もたげる余地を見出し得ない訳ですから、たとい道徳的批判を下すべき分子が混入してくる事件についても、

これを徳義的に解釈しないで、徳義とはまるで関係のない滑稽こっけいとのみ見る事もできるものだと言ふ例証になります。けれどももし倫理的の分子が倫理的に人を刺戟しげきするようにまたそれを無関係の他の方面にそらす事ができぬように作物中に入込んで来たならば、道德と文芸というものは、けつして切り離す事のできないものであります。両者は元来別物であつて各独立したものであるというような説も或る意味から云えば真理ではあるが、近来の日本の文士のごとく根柢こんていのある自信も思慮もなしに道德は文芸に必要であるかのごとく主張するのははなはだ世人を迷わせる盲者の盲論と云わなければならぬ。文芸の目的が徳義心を鼓吹こすいするのを根本義にしていけない事は論理上しかるべき見解ではあるが、

徳義的の批判を許すべき事件が経となり緯となりて作物中に織り込まれるならば、またその事件が徳義的平面において吾人に善悪邪正の刺戟しげきを与えるならば、どうして両者をもつて没交渉とする事ができよう。

道徳と文芸の関係は大体においてかくのごときものであるが、なお前に挙げた浪漫自然二主義についてこれらがどういう風に道徳と交渉しているかをもう少し明瞭めいりょうに調べてみる必要があると思います。すなわちこの二種の文学についてどこが道徳的でどこが芸術的であるかを分解比較して一々点検するのであります。こうすれば文芸と道徳の関係が一層明瞭になるのみならず、また浪漫自然二文学の関係もまた一段と判然はつきりするだろうと思います。

第一、浪漫派の内容から言うと、前申ぜんした通り忠臣が出て来たり、孝子が出て来たり、貞女が出て来たり、その他いろいろの人物が出て来て、すべて読者の徳性を刺激してその刺激に依つて事をなす、すなわち読者を動かそうと云う方法を講じますから、その刺激を与える点とは取りなも直なさず道義的であると同時に芸術的に違ちない。(文学と云うものが感情性のものであつて、吾人の感情を挑ちようはつ撥 喚起するのがその根本義とすれば)かく浪漫派は内容の上から云つて芸術的であるけれども、その内容の取扱方に至るとあるいは非芸術的かも知れません。という意味はどうもその書き方によくない目的があるらしい。こういう事件をこう写してこう感動させてやろうとかこう鼓舞してやろうとか、述作そのものに興

味があるよりも、あらかじめ胸に一物いちものつがあつて、それを土台に人を乗せようとしたがる。どうもややともするとそこに厭味いやみが出て来る。私が今晚こうやって演説をするにしても、私の一字一句に私と云うものがつきまっつわつておつてどうかして笑わせてやろう、どうかして泣かせてやろうと撥くすぶつたり辛子からしを管なめさせるような故意の痕跡が見え透すいたら定めし御聴ごらき辛いことで、ために芸術品として見たる私の講演は大いに価値を損こずることく、いかに内容が良くても、言い方、取扱とり方、書き方が、読者を釣つつてやろうとか、挑ちようはつ撥はつしてやろうとかすべて故意の趣があれば、その故意わざとらしいところ不自然なところはすなわち芸術としての品位かかわに關かつて来るのです。こういう欠点を芸術上には厭味いやみといつて

非難するのです。これに反して自然主義から云えば道義の念に訴えて芸術上の成功を収めるのが本領でないから、作中にはずいぶん汚ない事も出て来る、鼻持のならない事も書いてある。けれどもそれが道心を沈滞せしめて向下墮落の傾向を助長する結果を生ずるならばそれは作家か読者かどっちかが悪いので、不善挑撥もまたけつしてこの種の文学の主意でない事は論理的に証明できるのである。したがって善悪両面ともに感激性の素因に乏しいという点から見て、そこが芸術的でないと難を打つ事はできる。その代りその書きぶりや事件の取扱方に至つては本来がただありのままの姿を淡泊に写すのであるから厭味おちいに陥る事は少ない。厭味とか厭味でないとかいう事は前にも芸術上の批判であると御断りし

ておきましたが、これが同時に徳義上の批判にもなるからして自然主義の文芸は内容のいかんにかかわらずやはり道徳と密接な縁を引いているのであります。というのはただありのままを銜てらわないで真率に書くというのが厭味のない描写としての好所であるのであるが、そのありのままを銜わないで真率に書くところを芸術的に見ないで道義的に批判したらやはり正直という言葉と同じ事象に対して用いられるのだからして、芸術と道徳も非常に接続している事が分りましよう。のみならず芸術的に厭味がなく道徳的に正直であるという事がこの際同じ物を指しているばかりではなく理知の方面から見れば真という資格に相当するのだから、つまりは一つの物を人間の三大活力から分察したと異なるところはな

いのであります。三位一体と申してもよいでしょう。

こう分解して見ると、一見道義的で貫ぬいている浪漫派の作物に存外不徳義の分子が発見されたり、またちよつと考えると徳義の方面に何らの注意を払わない自然派の流を汲んだものに妙に倫理上の佳所があつたり、そうしてその道義的であるや否やが一にその芸術的であるや否やで決せられるのだから、二者の關係は一層明瞭になつて来た訳であります。また浪漫、自然と名づけられる二種の文芸上の作物中にこの道德の分子がいかに織り込まれるかもたいてい説明し得たつもりであります。

なお余論として以上二種の文芸の特性についてちよつと比較してみますと、浪漫派は人の氣を引立てるような感激性の分子に富

んでいるには違ちがないが、どうも現世現在を飛び離はなれているの憾うらみを免まぬかれない。妄みだりに理想界の出来事を点綴てんてつしたような傾かたむきがあるかも知れない。よしその理想が実現できるにしてもこれを未来に待たなければならぬ訳であるから、書いてある事自身は道義心の飽満悦樂をかうに十分であるとするも、その実己おのれには切實の感を与え悪いにくものである。これに反して自然主義の文芸には、いかに倫理上の弱点が書いてあつても、その弱点はすなわち作者読者共通の弱点である場合が多いので、必ひつき竟きようずるに自分を離れたものでないという意味から、汚い事でも何でも切實に感ずるのは吾人の親しく経験するところでありませう。今一つ注意すべきことは、普通一般の人間は平生何も事の無い時に、たいてい浪漫派

でありながら、いざとなると十人が十人まで皆自然主義に変わる
と云う事実であります。という意味は傍観者である間は、他に對
する道義上の要求がずいぶんと高いもので、ちよつとした紛^ふ
^ん紘^んでも過失でも局外から評する場合には大變苛^{から}い。すなわちお
れが彼の地位にいたらこんな失体は演じまいと云う己を高く見積
る浪漫的な考がどこかに潜^{ひそ}んでいたのであります。さて自分がそ
の局に當つてやつて見ると、かえつて自分の見縊^{みくび}つた先任者より
も烈^{はげ}しい過失を犯しかねないのだから、その時その場合に臨むと
本来の弱点だらけの自己が遠慮なく露出されて、自然主義でどこ
までも押して行かなければやりきれないのであります。だから私
は実行者は自然派で批評家は浪漫派だと申したいぐらいに考えて

います。次に御話したいのは先年来自然主義をある一部の人が唱となえ出して以後世間一般ではひどくこれを嫌きらつてはては自然主義といえは墮落とか猥わい褻せつとかいうものの代名詞のようになってしまいました。しかし何もそう恐れたり嫌きらつたりする必要は毫ごうもないので、その結果の健全な方も少しは見なければなりません。元来自分と同じような弱点が作物の中に書いてあつて、己と同じような人物がそこに現われているとすれば、その弱点を有する人間に対する同情の念は自然起るべきはずであります。また自分もいつかううぬほれぼれこういう過失を犯さぬとも限らぬと云う寂じやく寞まくの感も同時にこれに伴うでしょう。己うぬ惚ぼの面を剥はぎ取とつて真直な腰を低くするのはむしろそういう文学の影響と言わなければなりません。もし

自然派の作物でありながらこういう健全な目的を達することができなければ、それこそ作物自身が悪いのであると云わなければならぬ。悪いという意味は作物が出来損できそこなっているのです、どこか欠点があると云うのです。前説明ぜんした言葉を用いて評すれば、そういう作物にはどこか不道德の分子がある、すなわちどこか非芸術のところがある、すなわちどこか偽りを書いているのだという事に帰着するのです。ありのままの本当をありのままに書く正直という美德があればそれが自然と芸術的になり、その芸術的の筆がまた自然善い感化を人に与えるのは前段の分解的記述によつてもう御会得ごえとくになつた事と思ひます。自然主義に道義の分子があるという事はあまり人の口にしないところですからわざわざ長々

と弁じました。もつともただ新らしい私の考だから御吹聴ごふいちようをす
るといふ次第ではありません。御承知の通り演題が「文芸と道德」
といふのですから特にこの点に注意を払う必要があつたのです。

これで浪漫主義の文学と自然主義の文学とが等しく道德に關係
があつて、そうしてこの二種の文学が、冒頭に述べた明治以前の
道德と明治以後の道德とをちゃんと反射している事が明瞭めいりように
なりましたから、我々はこの二つの舶来語を文学から切り離して、
直に道德の形容詞として用い、浪漫的道德及び自然主義的道德と
いふ言葉を使つて差支さしかえないでしよう。

そこで私は明治以前の道德をロマンチックの道德と呼び明治以
後の道德をナチュラリスチックの道德と名づけますが、さて吾われわ

々が眼前にこの二大區別を控えて向後我邦わがくにの道德はどんな傾向を帯びて發展するだろうかの問題に移るならば私は下しものごとくあえて云いたい。「ロマンチックの道德は大体において過ぎ去つたものである」あなた方がなぜかと詰問なさるならば人間の智識がそれだけ進んだからとただ一言答えるだけである。人間の智識がそれだけ進んだ。進んだに違ない。元は真まことしやかに見えたものが、今はどう考えても真とは見えない。嘘うそとしか思われなからである。したがって實在の權威を失つてしまうからである。単に實在の權威を失うのみならず、実行の權利すら失つてしまうのである。人間の智識が発達すれば昔のようにロマンチックな道德を人に強しいても、人は誰も躬きゆうこう行するものではない。できない相

談だという事がよく分つて来るからである。これだけでもロマンチックの道徳はすでに^{すた}廃れたと云わなければならない。その上今日のように世の中が複雑になつて、教育を受ける者が皆第一に自治の手段を目的とするならば、天下国家はあまり遠過ぎて直接に我々の^{ひとみ}眸には映りにくくなる。豆腐屋が豆を潰^{つぶ}したり、呉服屋が尺を度^{はか}つたりする意味で我々も職業に従事する。上下^{こそで}挙つて奔走に衣食するようになれば経世利民仁義慈悲の念は次第に自家活計の工夫^{くふう}と両立しがたくなる。よしその局に当る人があつても単に職業として義務心から公共のために画策遂行するに過ぎなくなる。しかのみならず日露戦争も無事に済んで日本も当分はまず安泰の地位に置かれるような結果として、天下国家を憂^{うれい}としなくても、

その暇に自分の嗜欲しよくを満足する計をめぐらしても、差さ支つかえない時代になつてゐる。それやこれやの影響から吾々われわれは日に月に個人主義の立場からして世の中を見渡すようになってゐる。したがつて吾々の道徳も自然個人を本位として組み立てられるようになってゐる。すなわち自我からして道徳律を割り出そうと試みるようになってゐる。これが現代日本の大勢だとすればロマンチックの道徳換言すれば我が利益のすべてを犠牲に供して他のために行動せねば不徳義であると主張するようなアルトルイスチック一方の見解はどうしても空疎になつてこなければならぬ。昔の道徳すなわち忠とか孝とか貞とかい字を吟味ぎんみしてみると、当時の社会制度にあつて絶対の権利を有しておつた片方にのみ非常に都合の好

どのような義務の負担に過ぎないのであります。親の勢が非常に強
 いとどうしても孝を強しいられる。強いられるとは常人として無理
 をせず自己本来の情愛だけでは堪たえられない過重の分量を要求
 されるといふ意味であります。独ひとり孝ばかりではない、忠でも貞
 でもまた同様の観があります。何しろ人間一生のうちで数えるほ
 どしかない僅きんしょう 少の場合に道義の情火がパツと燃焼した刹せつな那を
 捉とらえて、その熱烈純厚の気象きしょうを前後に長く引き延ばして、二六
 時中すべてあのごとくせよと命ずるのは事実上有り得べからざる
 事を無理に注文するのだから、冷静な科学的觀察が進んでその偽
 りに気がつくと同時に、権威ある道徳律として存在できなくなる
 のはやむをえない上に、社会組織がだんだん変化して余儀なく個

人主義が発展の歩武ほぶを進めてくるならばなおさら打撃こうむを蒙るの
明かであります。

こういうと何だか現在に甘んずる成なりゆき行主義のように御取りに
なるかも知れないが、そう誤解されては遺憾いかんなので、私は近時の
或人のように理想は要いらないとか理想は役に立たないとか主張す
る考は毛頭ないのです。私はどんな社会でも理想なしに生存する
社会は想像し得られないとまで信じているのです。現に我々は毎
日或る理想、その理想は低くもあり小ちいさくもありましよう、がとに
かく或る理想を頭の中に描き出して、そうしてそれを明日実現し
ようと努力しつつまた実現しつつ生きて行くのだと評しても差さ
支かえないのです。人間の歴史は今日の不満足を次日物足りるよう

に改造し次日の不平をまたその翌日柔らげて、今日こんにちまでつづいて来たのだから、一方から云えばまさしくこれ理想発現の経路に過ぎないのであります。いやしくも理想を排斥しては自己の生活を否定するのと同様の矛盾おちいに陥りますから、私はけっしてそう云う方面の論者として諸君に誤解されたくない。ただ私の御注意申し上げたいのは輓ばんきん近科学上の発見と、科学の進歩に伴って起る周密公平の観察のために道德界における吾々の理想が昔に比べると低くなった、あるいは狭くなったというだけに過ぎない。だから昔のような理想の持ち方立て方も結構であるかも知れぬが、また我々も昔のようなロマンチストでありたいが、周囲の社会組織と内部の科学的精神にもまた相当の権利を持たせなければ順応調

節の生活ができにくくなるので、自然ナチュラリスチックの傾向を帯びるべく余儀なくされるのである。けれども自然主義の道德と云うものは、人間の自由を重んじ過ぎて好きな真似まねをさせるといふ虞おそれがある。本来が自己本位であるから、個人の行動が放縦ほうじゆ不羈うふきになればなるほど、個人としては自由の悦樂を味い得る満足があると共に、社会の一人としてはいつも不安の眼を睜みはつて他を眺めなければならなくなる、或る時は恐ろしくなる。その結果一部分の反動としては、浪漫的の道德がこれから起らなければならぬのであります。現に今小さい波動として、それが起りつつあるかも知れません。けれども要するに小波瀾しょうはらんの曲折えがを描く一部分に過ぎないので大体の傾向から云えばどうしても自然主義の

道徳がまだまだ展開して行くように思われます。以上を総括して今後の日本人にはどう云う資格が最も望ましいかと判じてみると、実現のできる程度の理想を懐いて、ここに未来の隣人同胞との調和を求め、また従来の弱点を寛容する同情心を持して現在の個人に対する接触面の融合剤とするような心掛——これが大切だろうと思われるのです。

今日の有様では道徳と文芸と云うものは、大変離れているように考えている人が多数で、道徳を論ずるものは文芸を談ずるを屑いさぎよしとせず、また文芸に従事するものは道徳以外の別天地に起臥きがしているように独りひとぎめで悟さとつているごとく見受けませんが、蓋けだし両方とも嘘うそである。その嘘である理由は今までやって来た分解で御ご

合点がてんが行つたはずであります。もつとも社会と云うものはいつでも一元では満足しない。物は極きわまれば通ずとかいう諺ことわざの通り、浪漫主義の道徳が行きづまれば自然主義の道徳がだんだん頭を擡もたげ、また自然主義の道徳の弊が顕著になつて人心がようやく厭いやげに襲おそわれるとまた浪漫主義の道徳が反動として起るのは当然の理であります。歴史は過去を繰くり返すと云うのはこの事にほかならぬのですが、嚴密な意味でいうと、学理的に考えてもまた實際に徴してみても、一遍過ぎ去つたものはけつして繰返されないので、繰返されるように見えるのは素しろ人ろうとだからである。だから今もし小波瀾しょうはらんとしてこの自然主義の道徳に反抗して起るものがあるならば、それは浪漫派に違ちがひないが、維新前の浪漫派が再び勃興ぼつこう

する事はとうてい困難である、また駄目である。同じ浪漫派にしても我々現在生活の陥欠を補う新らしい意義を帯びた一種の浪漫的道徳でなければなりません。

道徳における向後の大勢及び局部の波瀾として目前に起るべき小反動は要するにかくのごとき性質のものであつて、道徳と文芸との密接なる関係もまた上説のごとすとすれば、これからわが社会の要する文芸というものもまた同じ方向に同じ意味において発展しなければならぬのも、また多言を要せずして明かな話であります。もし活社会の要する道徳に反対した文芸が存在するならば……存在するならばではない、そんなものは死文芸としてよりほかに存在はできないものである、枯れてしまわなければならぬ

いのである。人工的に幾ら声を囁^からして天下に呼号してもほとんど無益かと考えます。社会が文芸を生むか、または文芸に生まれるかどっちかはしばらく措^おいて、いやしくも社会の道德と切つても切れない縁で結びつけられている以上、倫理面に活動するていの文芸はけつして吾人内心の欲する道德と乖^か離^{いり}して栄える訳がない。

我々人間としてこの世に存在する以上どうもがいても道德を離れて倫理界の外に超然と生息する訳には行かない。道德を離れることができなければ、一見道德とは没交渉に見える浪漫主義や自然主義の解釈も一考して見る価値がある。この二つの言葉は文学者の専有物ではなくって、あなた方^{かた}と切り離し得べからざる道德

の形容詞としてすぐ応用ができるというのが私の意見で、なぜそう応用ができるかという訳と、かく応用された言葉の表現する道徳が日本の過去現在に興味ある陰影を投げているという事と、それからその陰影がどういう具合に未来に放射されるであろうかという予想と——まずこれらが私の演題の主眼な点なのであります。

——明治四十四年八月大阪において述——

青空文庫情報

底本：「夏目漱石全集10」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年7月26日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～1972（昭和47）年1月

※底本で、表題に続いて配置されていた講演の日時と場所に関する情報は、ファイル末に地付きで置きました。

入力：柴田卓治

校正：大野晋

1999年12月23日公開

2004年2月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

文芸と道徳

夏目漱石

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>